



しかし、南海トラフ地震の場合は、震源が陸地に近く、東日本に比べて、津波の到達時間ははるかに短く、警報を待っていたのでは、逃げ遅れる地区も多い。すなわち、地震発生と同時に、避難を始めないと、間に合わないのだ。

こうした内容の発表は終わったのち、質疑応答の段になって、仰天する発言があった。発言の主は、内閣府や国交省にいたという霞ヶ関の権化みたいな元役人だ。

発表の内容は「マンザイだ」という。法律によって義務化されている災害情報があるからこそ、災害が発生後の、行政手続きが進むのだと主張する。傍聴していた研究者から、思わず、失笑がもれた。この御仁の発言は、あたかも、人命より行政手続きのほうが大切だと主張しているのと同じであることに本人は気づいていない。

昨年、今年と相次ぐ水害で堤防が破堤し、堤防の構造すら見直せという国の方針が示されつつあるなかで、防災において役所の存在価値が問われているなかでの、学会の珍事に、大いなる危惧を感じたのは、学会の会場にいた研究者とて同じだったろう。

(令和元年 10 月)